E—14　来客の実態について

奈良女大家政　○鈴木　素子
疋田　洋子
近藤　公夫
北村　　君

1.　かって封建時代においては住居の機能は来客中心に考えられていたが，現代においては主として家族中心になってきている。そのような時点において家庭への来客実態をつかむことは住居空間を考える上において必要となる。そこでこの問題をとりあげ調査を行ない，考察を試みた。

2.　名古屋市内の住宅公団団地志賀住宅において 200 家庭の主婦を対象とし，来客の種類，頻度及び接待法等について面接調査を行なった。調査期間は昭和43年１月～７月である。

3.　来客の頻度は平均して２日ないし３日に１度である。来客の種類別に頻度をみると近隣，親戚，友人，職業上の知人，その他の順に低くなっている。接待方法別に頻度をみると，お茶とお菓子程度のサービスが最も多く，次いで立話となっており，この両者を合わせると全体の75％となる。次いで食事を出す，宿泊させる，その他の順になっている。また客の種類と接待方法についてみると宿泊する人のうち90％は親戚であり，立話程度ですませる人のうち95％が近隣である。